

思考力を育成する学習の構想

福井大学

松友 一雄

一 第三の情報源

教師は学習者に、日常生活において「ものを考える」場合には、目的に応じてできるだけ情報を集め、多角的に考えるようになって欲しいと願う。そのためには、情報収集力を身につける学習を計画的に組織していく必要がある。

一方で、実際の授業では、教材などに提示されている情報との関係をより深め、普段考えもしないような話題に対してもしっかりと真剣に考えて欲しいとも願い、それゆえに提示した情報と学習者の知識や経験とを結びつけようと躍起になる。気が付けば授業の大半がその作業で終わってしまい、提示された情報と自分との関係に目が向くところでタイムアップとなって、考えさせるところまで力が及びにくい。

「ものを考える」行為を捉える一つの観点として、どのような情報を操作するのかという点がある。この観点で授業の中で学習者が操作している情報とは一体どのようなものであるかを捉えると、おそらく次の二つになる。

- ① 自分の経験や知識
- ② 教材や教師から提示された情報

①は、私たちが日常生活の中でのものを考える場合である。この場合、自分の経験したことや知っていることを操作して物事を考えるので、知識や経験の偏りがあれば、当然考えた結果も偏りが生じる。また、考える方法自体がしっかりと身につけていなければ、しっかりと考えることもできない（さらに、話題によってはあまり学習者の経験や知識を持ち込まない方がよいものもある）。

②は、学校の授業で提示された情報を操作して物事を考える場合である。この場合、考える目的が持てないときは考える必然性がないため、考えようとしていない学習者が出てくる。また、提示された情報に対する理解が浅かったり、自分との関係が薄かったりすると、適当に考える学習者が出てくる。

つまり、①は狭く偏りがあるし、感情的に扱いやすい。②は自分との関係が見出しにくく、十分な理解も得られていない。現在の中学生在が「ものを考える」場合、おそらくこのどちらかに当てはまってしまうので、なかなか考える力が身につかないのではないか。

そこで、第三の情報源として、「自分の調べた情報」を学習者に持たせてから考える学習に入ることを提案する。

情報収集を通して、①が位置づけられたり広がったりするし、②への理解も深められる。自分の調べた情報が増加することにより、話題に対して多角的な観点が形成され、自己関与度も高まりを見せるはずである。

二 考え方の学習より大切なもの

次に、どのように情報を操作するのかという点がある。

物事の特徴を捉えるために比較する、複数の出来事を並べて考えることで共通する一般

	発問の目的	発問の形態
一般的・包括的	概念の説明	a なぜか、説明してください。 b どのようにするのか説明してください。(どのくらい、どんな状態なのか) c なぜ、～が大切なのですか？
	既有知識や経験の活性化と利用	d ～について、よく知っていますか？ e 以前習ったこととどのように関係していますか？
具体的・分析的	比較と対照	f ～の長所と短所は何ですか？ g ～とからの違いは何ですか？ h ～と～はどのように同じなのですか？ i ～について、～と～を比較してください。
	推論	j もし～なら、何が起こりますか？ k ～の原因は何だと考えますか？
	関係性の分析	l ～は～に、どのような影響を与えますか？ m ～は～に、どのようなことをもたらしますか？
応用的	例を作る	n 例を挙げて説明してください。 o 他に似たような例はないですか？
	アイデアの統合	p この問題を解決する方法はありますか？ q 今までの意見をまとめるとどうなりますか？
	評価・判断	r 最も良いのは何ですか？ s なぜそれが最も良いのですか？ t ○○君の意見に賛成ですか？ 反対ですか？ またその理由は何ですか？

(King.A.1992 Facilitating elaborative learning through guided student-generated questioning. Educational psychologist 27.111-126の表を松友が改めたもの)

性を導く、等の思考の道筋は、論説文教材などでも提示されている。こういった教材を用いて学習者に思考力を身につけさせるために、指導者の多くは次の三つのステップを踏む。

- 1 教材に記されている思考の道筋に目を向け、その効果や意味を理解させる。
- 2 話題を変えて、学習した思考の道筋を使わせる。
- 3 自分の考えた道筋をより明らかなものにするために表現学習を行わせる。

この三つのステップは、確かに思考力が形

成されていく道筋に対応しているので効果的な学習の連続性であるといえる。しかし、こうした学習を重ねても、普段の学習者の思考力が向上した姿はなかなか見られないのが実情である。

なぜか？ もう一度、私たちがものを考える時のことを振り返ってみる。

他人から求められる場合ではなく自分でものを考える場合、その出発点は「問い」なのである。問いを出発点にした「自己内対話」がものを考えることだとしたら、先に挙げた三つの学習だけでは、学習者は「考え始めること」自体の学習を行っていないことになる。

日常生活の中でのあらゆる出来事や、学習

の中で提示される様々な情報に対して様々な問いを持つことは、興味関心の問題でもあるが、やはり能力的な側面が強い。つまり、学習の中に考える場面を構想すること以上に、日々の授業の中で、様々な発問を与えることで、「考え始める力」を育成していく必要がある。

左上の表を基に、自身の授業でどれくらい多角的な問いを学習者に投げかけているかを捉えて欲しい。思考力はモノから学ぶ側面と人から学ぶ側面とがあり、どちらも重要な側面である。

三 おわりに

今回は、個人思考に関する学習について触れた。紙幅の都合により、もう一方の集団思考に関する学習には触れることができなかったが、思考力を育成する学習を構想する際には、両者を効果的に学習過程に配置する必要がある。

まつとも かずお 福井大学助教授。現在、福井県周辺の小学校や中学校で「対話型学習」への取り組みを続ける。また、サイトを立ち上げて学校現場への多角的な情報支援に取り組んでいる。
(<http://www.jie-labo.com/>)